

# 大阪天満宮御文庫のこと

## 連歌書を中心に

島津 忠夫 (大阪大学名誉教授)

大阪天満宮御文庫の蔵書については、『大阪天満宮御文庫和漢書目録』(昭和五十二年十月刊)が出ている。それは「国書分類目録」と「漢籍分類目録」とから成り、「国書分類目録」には、初めに、時の宮司寺井種茂氏の序があり、目録作成に当たられた中村幸彦先生以下二十五名の方々の名前が連記されている。それは混沌会に属する人々であった。ちなみにその折は私は名古屋在住時で参加していない。「漢籍分類目録」の方は、「長澤規矩也・ちづ編 孝三校」と見える。

私は、それより先に『大阪天満宮文庫連歌書目録』(昭和三十八年稿、昭和四十六年一月刊)を編んでいた。それにも、寺井種茂氏の序があり、野間光辰先生の「天満宮連歌所と西山宗因」(ガリ版の昭和二十八年七月菅公千五十年展観目録の再掲載)がある。その「後記」に、私は昭和三十四年に依頼され、昭和三十八年によく出来たことを記している。その頃は、佐賀大学講師で、夏休みに帰省して作ったもので、誤りが多かった。

大阪天満宮御文庫の由来については、寺井氏の『大阪天満宮御文庫和漢書目録』の序に大略のことが記されている。略記して取り出すと、  
享保十五年(一七三〇)「天満宮御文庫講」が結成され、自家開版書初刷りの献本をしたことより始まる。

天保八年(一八三七)大塩平八郎の乱の兵火に遭ったが、辛うじて御文庫は延焼を免れた。

大正十一年(一九二二)漢学者近藤南州文庫の寄進を受ける。  
昭和二十年(一九四五)の戦火にも御文庫は残った。  
ということになる。

『大阪天満宮連歌書目録』(以下『連歌書目録』と略称)と『大阪天満宮御文庫国書分類目録』(以下『国書分類目録』と略称)を比較すると、『連歌書目録』では、以下のように分類している。

### 第一部南曲奉納本 第二部

- (一) 連歌作品
- (二) 連歌学書
- (三) 紀行
- (四) 雑

- 1 書目
- 2 伝記
- 3 雑記
- 4 和歌
- 5 雑書
- 6 補遺

それに対して、『国書分類目録』では、連歌は、「第五 文学」の中に、  
四 大阪天満宮御文庫連歌叢書(南曲奉納本・連歌作品集・連歌学書・紀行・雑)

### 五 連歌(御文庫連歌叢書外)

とあり、「四 大阪天満宮御文庫連歌叢書」では、『連歌書目録』をそのまま収録しており、「五 連歌(御文庫連歌叢書外)」では、『連歌書目録』に洩れているものを集めている。

そのため『連歌書目録』の誤りがそのまま残ってしまったのは遺憾である。また、「大阪天満宮御文庫連歌叢書」とは、本来南曲奉納本をいふべきものであると私は思っている。『連歌書目録』の「(四 雑)」の「4 和歌」は、『国書分類目録』では、「第五 文学の三 和歌」に編入されている。これは、当時長沢氏から中村先生を通じて連絡があり、全体の目録のために止むを得ないと思いい同意したのであるが、この「和歌」は、滋岡長昌関係のもので、本来は、一般書とは区別すべきものであった。

ところで、大阪天満宮御文庫の連歌書であるが、それについては、「大阪天満宮蔵の連歌書」(島津忠夫著作集第六巻『天満宮連歌史』平成十七

年一月、和泉書院刊所収）に記していることと当然記載が重なる。これは、平成五年、第四十五回俳文学会全国大会を武庫川女子大学で開催した折、大阪天満宮の御好意を得て、武庫川女子大学で展覧をした際に、『連歌書目録』の誤りも正して作成した「大阪天満宮文庫展覧目録」をさらに訂正して収載している。それは、

- ① 西山家伝来書
- ② 滋岡家旧蔵連歌古写本
- ③ 岡延宗献上本
- ④ その他

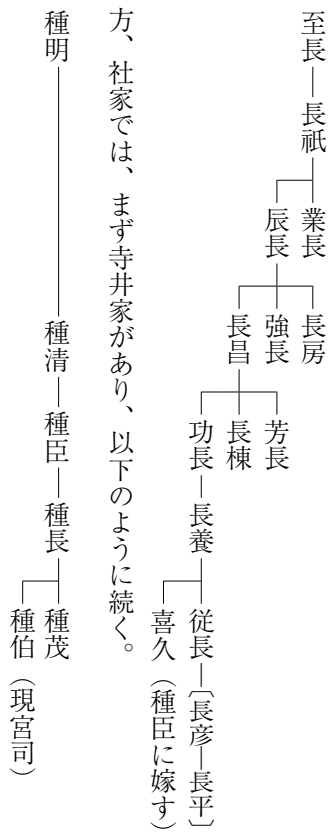
に分類している。これは、俳文学会ということもあったが、大阪天満宮御文庫の連歌書の性格が判明するように配慮したものであった。

大阪天満宮神主・社家については、『大阪天満宮の研究』（平成三年、大阪天満宮資料室刊所収。田中方男氏作成）に詳しい。

もともと大阪天満宮には、神主家と社家があった。「神主」は「シンシユ」と読むことを滋岡長平氏より何度も聞いていた。神主家では、神原家（地付神主家）が以下のように、三代続く。

景次——景秋——三春（明暦三年没）

三春が亡くなった後を、東坊城長維の次男が高辻豊長の猶子となって滋岡至長として、下阪し、明暦四年（一六五八）に大阪天満宮神主に就任する。以下、滋岡家は、養子を迎えることがあっても、大正四年（一九一五）に十一代従長が没するまで、以下のように連綿と続くのである。



一方、社家では、まず寺井家があり、以下のように続く。

滋岡従長の後を受けて、寺井種臣が宮司となり今日に至っている。ほかに、社家として、渡辺家・東渡辺家・大町家・大道家・東大道家・小谷家・沢田家があった。それぞれに蔵書があったことは、滋岡長昌の蔵書の奥書などから知られるが、現在どうなっているかは未詳である。

現在、大阪天満宮の御文庫に収められている滋岡家旧蔵の連歌書は、昭和二十二年に戦火にあった時は、御文庫ではなく別の建物に保管されていた。この建物が戦災に遭わなかったのは、まさしく偶然の奇遇であり、幸運であった。昭和二十四年のころから私が大阪天満宮連歌書の閲覧を請うたのは、当時知られていた南曲奉納本の「大阪天満宮御文庫連歌叢書」であった。ようやく閲覧を許可されて拝見するようになったのは、たしか昭和二十六年のころであったと思う。当時の御文庫には、天満宮御文庫講の寄贈本、近藤南州文庫などが雑然と収められており、中は暗く、懐中電灯で探す状態であった。当時は今の研究室もなく、御文庫の前のわずかの空間に持ち出しては読んだのである。その前には小さな部屋があったが、戦後のこととて焼け出された人が住んでおられた。連歌書は南曲寄贈の連歌叢書だけが納められていた。『平家物語』の写本が目だったが、まだ、当時は、連歌・和歌以外にはあまり関心がなく、とても一人でどうすることも出来ない量であり、また後に九州で、中村幸彦先生のご指導により肥前島原松平文庫以下の整理を手掛ける以前だったこともあって、気には掛かりながら、そのままになっていた。

その後、私の勤めていた大阪府立市岡高校に、当時の宮司であった寺井種長氏より電話があり、建物を取り壊したら箱が見つかり、その中にはどうやら連歌書らしきものが一杯入っているから、見に来てほしいということとで、放課後に駆けつけたところ、それが滋岡家旧蔵の連歌書だったのである。以来、私は放課後は大阪天満宮を回って帰るのが日課になった。たまたま、市岡から天満橋行きの市電があり、天神橋で下車して歩いたのだった。

その折、整理した函架番号が今も残っている。先の「昭和二十八年七月菅公千五十年展覧目録」というのは、新しく出て来た連歌書を中心に、当時は大阪天満宮の社務所に接続して能楽堂があり（今は服部天満宮に移設

されている)、そこに並べられたものであった。その連歌書の中には、連歌古写本の類が多くあり、何よりも西山宗因の自筆がいくつもあった。その折、天神像の画幅が多く掛けられて目を見張ったことを覚えている。

これらの連歌書は、滋岡従長氏のあと長彦氏が神主を継がれず、宮司職が寺井家に移った際に、大阪天満宮にそのままになっていたものかと思われる。滋岡家の蔵書は、一部は長彦氏の代に売り立てられ、その残部は長平氏が所蔵されていたようだ。昭和十年九月に『滋岡家蔵書入札目録』が出ている。昭和五十年代のことになるが、池上禎造先生より突然の電話があった。先生は、長平氏と姻戚関係に当たられるよしで、長平氏のもとになお所蔵されている連歌書の類を見てほしいと言われ、さっそく東京の滋岡家にお伺いして見せていただいた。『入札目録』に出て、残ったものようであった。爾来長平氏の御厚誼に与かるようになり、そうした縁から武庫川女子大学に一部を寄贈していただくことになる。それは『武庫川女子大学付属図書館蔵滋岡文書目録』(平成十年刊)を見られる。長平氏は平成十七年三月二十九日、八十八歳で逝去された。滋岡家のものには、『滋岡庫』という印記がある。滋岡家の文学および蔵書については、「神主 滋岡家代々と文学」「滋岡長松をめぐる人々―大阪天満宮文庫蔵連歌書の書写 奥書から」(島津忠夫著作集『天満宮連歌史』所収)に詳しく触れている。

滋岡家代々の蒐集による連歌書には、『美濃千句』(江戸極初期写)、『月村千句』(伝玄清写)、『梅薫集』(伝兼載写)、『折善集』(伝宗牧写)、『住吉法楽千句』(天文八年写)、『臨江齋千句』(里村昌叱写)などがあり、それにおびただしい滋岡長昌筆の連歌蒐書がある。長昌(号、長松)は、宝暦七年(一七五七)に生まれ、明和八年(一七七二)十二月、十五歳で家職を継ぎ、文政十三年(一八三〇)七十四歳で没している。わざわざ「末の世にもしこれを見てよめぬとて/思案する人あらば嬉しも」という印を作り、自筆の書には捺しているのも好ましい。その書写した連歌書には、『千金莫伝抄』『紹芳連歌』『下葉』『卜純連歌』などの今日では他に伝存を見ない孤本が含まれている。ことに『卜純連歌』など、最初に北海道松前に旅をした連歌師の句集として、現在東北・北海道では注目を浴びている

ようである。

岡延宗献上本である「大阪天満宮連歌叢書」は、全百七十八冊で、百韻集(横本)、千句(横本)、付句集并紀行(横本または半紙本)に分類されている。浅葱色表紙で、左肩に墨書外題のある同一の装釘より成っている。岡延宗が文化年中に書写し、弘化二年(一八四五)に大阪天満宮に奉納している。これには、必ず、「岡」(瓢箪形)という印と、「天満菅廟御文庫奉納/書籍標印不許売買」の印が捺されている。滋岡家旧蔵本の中に、天保十三年(一八四二)の延宗自筆の『独吟万句』があり、長昌の勧めで、奉納にあたり試みたものであることが記されている。岡延宗は南曲と号し、長昌の連歌仲間の町人であった。

『国書分類目録』の「(8)連歌(御文庫連歌叢書外)」には、『連歌書目録』未掲載の連歌二十九点があげられている。そこには、『連歌新式追加并新式今案等』(江戸中期写)、『連歌式拔書』『宗春聞書』『引随』『拾花集』『寛永十六年近衛桜御所連歌』『撰州中島天満宮年次千句始 寛文十一年至寛保三年』『稽古連歌 弘化二年二月二日種清宅』など、主として寺井家の旧蔵本である。その中に、『利清千句』があり、「島田蔵書」の印記があり、この書がどういう由来で、ここに存在するのかはまったく不明であるが、松田利清の俳諧独吟千句で、これが連歌の部にあつたためか人目につかなかつた。島津忠夫著作集第五卷『連歌・俳諧―資料と研究―』に第一百韻を翻刻している。

その滋岡家旧蔵本の中に、西山家伝来書が含まれている。西山家の系図をあげると以下の通りである。

西山宗因——宗春——昌察——昌林——宗(昌)森  
宗珎

正保四年(一六四七)九月、西山宗因が大阪天満宮連歌所の宗匠として下阪し、以下宗春・昌察・昌林・宗森と続くが、宗森の代に離れることになる。その後、文政四年(一八二二)五月六日に西山宗因末葉の老婆が、先祖より伝来の連歌書を、末々譲るものがないので滋岡家に納めておきたいと持参したことが『滋岡家日記』に見えている。筆まめな滋岡長昌は、

自筆で『連歌書籍目録』に書き留めているが、ほぼ現存のものとは一致する。滋岡家旧蔵本の中に『西山家什物目録』（『西山宗因全集』第五卷に翻刻予定）がある。これは、宝暦十四年（一七六四）四月に西山宗弥が記したもので、宗因以来の西山家に伝来した向栄庵文庫の軸物・書冊、什物を列記している。その巻頭部分を上げると、

- 一 天満宮神像 四箱
- 一 人丸像 一箱
- 一 日本武尊 一箱
- 一 菅公像 一箱
- 一 同辞世短冊 一箱
- 一 実省像〔自画自讃〕 一箱
- 一 牡丹花像〔充信筆〕 一箱

とあり、「相撲宗因賛」（保友画）などの珍しいものもあったことが知られる。その書冊の始めには、

- 大和物語 二
- 新古今抄 二

心敬付句

徹書記物語

宗因独吟

壁草 連歌付句抄

宗祇筑紫記行

文字鎖 コトハ名有物注

歌林撲漱〔拔書〕

二根集拔書 歌連歌

以下が続く。また、長昌の『雜記十番』（れ15・28）の中に、「向栄庵西山昌林文庫造立の記」（『西山宗因全集』第五卷に翻刻予定）が書き留められており、それには、

曾祖宗因、肥後の国を出、法橋昌琢にしたがひて、筑波山の深き陰に分入、佐保川の絶ぬ流をくみそめしよりこのかた、おほぢ・父・むまごのやつがれに至るまで、此道を道として此家を家とす。されば、

世々の歌の集、家々のことのは、古き世の物がたりの巻く、つらね歌のよしあることなど書あつめたるすくなからず。私に文庫をたてをかまほしき心は有ながら、力のたらざるを愁へて、徒に年月を送りぬ。小家がちなる所にて、火あやうしといふこと常のことぐさたるに、<sup>あつさへ</sup>剩 去年の冬遠からぬ程のおびたしく回祿ありしにおどろかさ<sup>とこころ</sup>れて、もし此後災にあはゞ、子孫に伝ふべきものもなく、此道を継べきよすがも有まじければ、はやく年比の望みを果すべきよし、たらちねの母の諫めにより、よりてしたしき人々にかたらひはべりしかば、をのく力を合せられて本意のごと倉をつくりて書櫃を蔵め侍りぬ。尚又たらざるを補んがため、よりく見及聞及ぶにしたがひ、言の葉の便とならむ文どもを書うつし、庫の中にみたしめむことを願へり。鳥のあとだにとゞまれば、我心ざしも久しく伝はらましといふ事しかり。

鳥の跡や世々にふみをく霜の庭

于時延享四年歲次丁卯十月記

とあり、西山家には、多くの什物や書籍が伝存していたことが知られる。そのうちの、滋岡家旧蔵本の中に見られるものは、宗因筆の『東国紀行』（宗牧）、『昌琢発句帳』（若書き）、『昌琢発句帳』、宗因自筆『宗因発句帳』、『桜御所千句』（題簽宗因筆）、「西山宗因筆」と昌察の筆）、『十花千句』、『豊前小倉千句』などや、宗春自筆の『発句帳』、『発句愚草』、『連歌文字撰』など、昌察筆の『正方追善千句』（宗因筆に似せて写す）、『豊前小倉千句』（宗因自筆本の転写）など、昌林自筆の『昌林発句集』であった。筆跡の鑑定については『連歌書目録』は誤りが多いので、「大阪天満宮蔵の連歌書」（鳥津忠夫著作集第六卷『天満宮連歌史』所収）によらるたい。

平成十七年は西山宗因生誕四百年で、『西山宗因全集』全六卷（八木書店刊）が、平成十六年より刊行中である。それに、平成十七年十月二十二日（十二月四日）には、伊丹の柿衛文庫で「宗因から芭蕉へ」の展覧会が開催された。さらに、平成十八年四月二十一日から五月二十八日には、八代市立博物館未来の森ミュージアムで、平成十九年一月二十日から二月

二十五日には、東京の日本書道美術館で開催される予定である。『宗因生誕四百年記念 宗因から芭蕉へ』（平成十七年十月、八木書店刊）の展覧図録が刊行されている。

私は、大阪天満宮の連歌書に接した当時から、西山宗因が詩性豊かな詩人であると思っていたので、ようやくこうした実りを見たことを喜ばしく思い、ここ二、三年は講演を依頼される度に、宗因の顕彰につとめてきたのである。それにしても、その出品一覧の中に、大阪天満宮蔵の西山宗因自筆本が多く見えることにつけても、大塩平八郎の乱、昭和二十年の戦火によくぞ焼けずに残ってくれたという思いは大きい。